

日本犯罪社会学会 第三回公開シンポジウム 幼少期の育ちと青少年の暴力 ―いま子育てを考える―

現在、教育現場における暴力的行為、「いじめ」や生徒間の暴力、先生に対する暴力などが問題になっています。このシンポジウムでは、脳生理学、社会学、法学、教育学などの見地から、暴力的性格を生み出すメカニズムについて明らかにし、子育てに現在悩んでいる人々、これから子育てをする人々、そして教育現場に携わる人々など広く一般市民の方々に、「子どもたちの」幼少期の人格形成に役立てていただきます。

- ・ 主催 日本犯罪社会学会
 - ・ 後援 文部科学省、警察庁、東京都、東京都教育委員会、青少年育成国民会議
 - ・ 開催日時 2006年10月20日(金) 14時～17時(開場13時半)
 - ・ 場所 国立オリンピック記念青少年総合センター小ホール(東京都渋谷区代々木神園町)
- 入場無料〔定員300名〕

基調講演

「発達脳の柔らかさと育ちの影響」

津本 忠治(独立行政法人理化学研究所脳科学総合研究センター・ユニット・リーダー)

「三つ子の魂百まで」という言葉があるように生後初期の環境、体験がその人の能力や性格に強い影響を及ぼすことは古くよりよく知られています。このように、子どもの脳がなぜ環境の影響を受け易いのか、それが何故後まで残るのかは、発達期の脳内神経回路が外からの入力や脳自身の活動によって変わり易いためであること、さらには感受性期と呼ばれる時期を過ぎると変化が固定され易いことが、最近の脳科学によって明らかにされてきました。今回の講演では、この発達脳の柔らかさ(可塑性)と感受性期、及び生後環境によって脳機能が変化する仕組みを紹介し、子育てについて考えたいと思います。

シンポジウム

「虐待と子どもの発達 一人として生き直す」 内田 伸子(お茶の水女子大学 副学長・理事)

現代の子育てに見られる過保護と虐待。現象的には反対だが、子どもを支配し発達を阻む点ではどちらも同じである。このような歪んだ環境の中で心身ともに深く傷つきながらも見事に立ち直り発達を遂げていく子どもたち。彼らの姿は人間の発達がいかに可塑性に富んでいるか、を示している。養育放棄の事例を縦断的に追跡することにより発達初期の養育者との間の愛着―心理的な絆が人間発達の「機能的準備系」として不可欠であること、さらに、思春期の自尊感情―「自分を高めたい」という意志力が困難を克服する鍵を握っていることを検証し、虐待を受けた子どもへの支援策や虐待の防止策を提案する。

「被虐待児から非行少年へ」 橋本 和明(花園大学 社会福祉学部福祉心理学科教授)

虐待と非行のメカニズムを考える際に着目すべき点は、多くの被虐待児は虐待を回避するために家出等の行動に出ていることである。この回避的行動は虐待に対する適応行動であり、非行とはいえない。しかし、それらの行動が反復されると、しだいに非行性を帯びていく。また、暴力的な非行と虐待との関係に限ってみても、彼らの粗暴な行為は親をまねた結果という学習理論を単純に当てはめるだけでは不十分で、さまざまな虐待による心理的な要因が絡まっている。そして、そのような虐待と非行があるケースの親子関係では、「被害と加害の逆転現象」が見られ、それが関係の修復をますます困難にしている。

「現代家族の子育てと暴力」 牧野 カツコ(お茶の水女子大学 名誉教授)

家族社会学の立場から、子どもが育つ場としての現代家族の特質を取り上げてみたい。家族は愛情と思いやりに満ちた場として期待されている反面、現実にはしばしばストレスや暴力を発生させる場にもなっている。家族の中の権力とジェンダーの構造が、家族の中に様々な暴力をもたらすこと、家族の閉鎖性、密室の子育てが暴力の発生と関係することを提起したい。また、現代家族の子育ての環境が、子どもの人とかかわる力を弱めている問題をとりあげ、暴力によらない人とかかわり方をいかに育てるかについて、提言したい。社会学の視点からは、個々の事例の分析や解釈はできないが、もしかしらわが子も・・・という人ごとではない昨今の不安の問題に答えることができるであろう。

「地域社会が少年非行に及ぼす影響 ―学童期の社会参加活動を中心に―」

小林 寿一(科学警察研究所 犯罪行動科学部少年研究室長)

これまでの実証的研究から、青少年の粗暴傾向の発達には、多くの要因が関わることがわかっている。本報告では、青少年の粗暴傾向を高める危険因子と低減させる保護因子の両方を検討した疫学的調査の結果を紹介し、青少年の暴力が発現するメカニズムを検討したい。さらに、青少年の暴力を予防する働きかけの効果について、主に欧米の評価研究の成果を紹介し、今後、青少年の暴力を低減させるために我が国で展開すべき方策について考察したい。

総司会

森田 洋司(日本犯罪社会学会会長、大阪樟蔭女子大学学長)